

「ものがたり」は再生する

相 京 範 昭

スペイン革命勃発、広東国民政府樹立、毛沢東を主席に中華ソビエト共和国臨時政府樹立（瑞金）、柳条湖事件、満州事変勃発、一九三一年労働争議二五〇〇件・小作争議三四一九件、東北の凶作で娘の人身売買、一九三二年一月宮崎ら逮捕される、上海事変、血盟団事件、ヒトラー大統領に指名される、関東軍満州国建国宣言、星野・八木ら逮捕される、五・一五事件、警視庁に特別高等警察部設置、三二年テーゼ。

農村青年社が設立された一九三一年二月からわずか一年半の間に起こった主な出来事をざっとならべてみた。この期間が戦前においてどれほどの意味を持っていたか現在の私たちは知っている。しかしその時代を生きた当事者はどんな予感を抱き、雰囲気を感じていたのだろうか。宮崎晃、八木秋子、星野準二ら「農村青年社」の実践活動をした主要メンバーは、「薪の火を焚く」で描かれているような日本の農村共同体に真つ正直に立ち向かい、瞬間を駆けぬけた。そして、「農村青年社事件」は数年後に起きる。

運動か事件か

運動があつてしばらくして「事件」が起きた。運動にも理由があれば事件にも理由がある。その理由、その時代の事実、に迫るにはどうしたらよいか。その事実を記録するということはどういうこ

とか。そして、現在の私たちに伝わるリアリティはあるのか。「農村青年社運動史」はすでに出版されていた。その本は宮崎晃の手によるもので、アナルコサンジカリズムなどに触れ、農村青年社の思想的流れが書かれている。しかし、私から見れば、農村青年社運動の魅力はそのような整理された思想の結果としての運動であったからとは思えない。当時、農村における運動を提案し、伊沢八十吉や鷹野原長義らの支持を受けながら運動を模索し、その瞬間を闘い抜いたところに農村青年社の人々の魅力があった。私が知っている八木秋子がそうであったように、メンバー全員が呼びかけた農民の心に届く言葉を第一義的に考えていた。あの野人、鷹野原長義がこう手紙に書いている。「農村青年社運動は農民の心理をよく捉えており、日常の生活に直接結びつき、大衆自ら求めているものであり、それ自体生活手段であった故、急速に運動は進展していったのである。言うなれば、人に合ったやわらかい感じの運動で、農民なら誰でも反対しないものでした」(宮崎あて一九七一年五月五日)。そして、都会において農村青年社の宣伝印刷物を発行する資金調達のためなら高級住宅をねらう窃盗も辞さない。しかも、すでに著名人であった八木秋子には迷惑がかからぬよう活動する配慮もあった。とすれば、ほんの一年半くらいの間において彼らが共有した精神を記録し、ドキュメントとして残す必要があるだろうと思つた。

しかし、いろいろ資料を集めているうち、農村青年社事件はそれだけではないとわかつてきた。確かに、この農村の人たちに届く言葉を心根に持っていた運動は立派に評価されるだろう。だが、もしそのまま、資金調達の窃盗事件で終わっていたら、いくつかあった戦前の、自分たちだけが夢中で駆け抜けた「ものがたり」を持つ運動にすぎなかったかも知れない。だが、農村青年社運動は数年後「事件」に仕立て上げられた。皮肉なことに、そのことで、この資料集があの時代の当事者

の「息づかい」を伝えられることができたと思つた。事件に仕立て上げられ、不条理な逮捕、裁判、服役と、次から次へと「事件」は勝手に進んでいったとき、彼ら自身はあの夢中で駆け抜けた運動を振り返った。そして、逮捕された現在と運動していた時点の自分、あるいは、かつて共同して闘った同志との感情の微妙なズレも見えていたはずである。決して自己肯定的ではなく、否定との裂け目が見えたと思つた。それが和佐田さんが語る自負と自己否定であり、「ものがたり」が生まれる土壌があったといえる。「事件」とは何か、推薦の文章を書いていたいた西川祐子さんはそこにふれて書いておられる。「事件」に仕立て上げられたことでさまざまな「ものがたり」が生まれ、時代のリアリティが見えてくる。だから素材である資料を組み合わせ、眺められるように編むことで、「その時代と事件の雰囲気」を言葉でなく編集で伝えることが私にとって課題となった。